

故郷の人物を知ろう

たかおか <sup>おん こ ち しん</sup> 温故知新

漆芸の名工で国学者／辻丹甫(1722～1805)

丹甫は現高岡市辻の出身で、高岡工芸漆器の祖とされます。幼少時、須田の長念寺に養子に入られますが、のち実家に戻され、高岡御馬出町に移ったといわれます。屋号は砥波屋、名は伊右衛門。別号は丹楓、今道、荒虫など。

宝暦期(1751～64)頃に京都で漆を何度も塗り重ねて彫刻する堆朱(黒)など中国風の漆芸を学びます。擬堆朱(黒)といって、木地を直に彫刻し、朱(黒)漆を塗り、灰墨様の古味を付けたり、漆錆を型抜きして薄肉模様を彫る技法や存星(彩漆を塗り線彫りする技法)などの技法を高岡にもたらしました。これらは「丹甫塗」と総称され、雷紋や亀甲の地紋の上に草花鳥獣、青海波、牡丹、孔雀などを彫り出

したものが多く、立体感と独特の艶が表現できるのが特徴です。高岡御車山の通町の後屏や木舟町の高欄・人形などは丹甫作と伝わっています。

また上方で国学者・建部綾足に俳諧・和歌を、次いで賀茂真淵の門弟加藤宇万伎に国学を学びま

した。「雨月物語」で知られる同門の上田秋成や賀茂真淵門派の国学者本居宣長とその後継者の本居大平らとも交際があり、高岡では漢学者・寺崎錦洲らを指導しました。漆芸で有名な丹甫ですが、詩文・国学にも親しんだ優れた文化人でした。著作に『いはほぐさ』、『喉音用字考』、『今道集』、『小貝』などがあります。(仁ヶ竹主幹)

問合先 博物館 図20-1572



伝辻丹甫作  
通町御車山後屏(部分)